

ドル/円相場のトレード戦略

■ 中長期展望

注目されていた英国の国民投票の結果は、大方の予想を裏切る EU 離脱となりました。ドル/円相場は直近の安値103円55銭をあっさり割り込み、2013年11月以来の100円割れとなり、一時99円ちょうどの安値まで下落しました。

【ドル/円 週足】



英国の EU 離脱は世界経済の先行き不透明感を強め、また米国の早期利上げを妨げるものと捉えられており、中期的にドル/円は円安に大きく戻る見通しはとて描けず、95円割れをもイメージする必要が出てきました。

95円水準は、2011年の安値から2015年の高値の61.8%戻しとなっており、当面のドル/円の下値の目処となります。

しかし、6月24日の99円はさすがに記録的なドル下がり過ぎと考えられます。

52週移動平均との乖離で見ると、24日の99円では約15%の下方乖離となり、リーマンショックを受けドルが下落した2008年の下方乖離とほぼ同じ水準になります。

相場が落ち着きを取り戻せば、過度な下がり過ぎの反動で105円程度までの戻りが期待できるかも知れません。

■ 短期展望

先週は、英国の国民投票で EU 離脱という結果となり、相場は大混乱となりました。

ドル/円相場のトレード戦略

106円台後半まで戻っていたドルは、一気に100円を割れ、2013年11月以来の水準である99円ちょうどまで下落し、その後103円まで値を戻すというパニック的な動きとなっていました。英国のEU離脱はマーケットのリスクオフの強化となってドル/円の上値を抑えることになるでしょうが、しかし短期的にはどの程度の悪影響を世界経済に与えるかは想定できず、一段の円高の材料にはなりにくいと考えられます。

また、再び100円を割り込んだ場合に為替介入の可能性が残っていることもドルを売り込みにくくする要因となります。

したがって、今週は緩やかなドル安・円高の相場展開が続くものの、100円割れを試すほどの勢いはないものと考えます。

短期間での急激なドルの下落で相場は下がり過ぎといえるため、自立的な反発が期待されますが、相場が落ち着きを取り戻すにはまだ少し時間が必要となりそうです。